50 Since1974

幸町リトルインディアンズ
50周年記念誌

INDIANS SAIWAICHO

ご挨拶（歴代代表）

柴草相談役（50周年記念立案者）

幸町リトルインディアンズは、６月２日記念すべき創部50周年を迎えました。初代鈴木代表が中心となり部員６人でスタートし荒涼とした埋め立て地を千葉市協力の下選手、指導者、保護者、そして地域の皆様のご協力も得て瓦礫の山を取り除きグランドとして整地し完成した。その周りには桜の木や花を植え子供広場が完成した。

広々と伸び伸びと野球が出来る環境の下で部員が増え日に日に強いチームが作り上げられていった。多くの方々の支えと歴代の選手、指導者のお陰で関東大会始め数多くの優勝旗を手にし強豪チームとして名を馳せるまでになった。野球のみならず新しい街にお祭りをとの思いで選手達による「インディアンズ祭り」を開催し地域の一大行事として広く親しまれた。

1979年、中国から招待を受け遠征し野球を通じ日中友好に貢献した。その後、アメリカ、再び中国に遠征し外国の子供達との交流を図ってきた。費用は、毎週日曜日にマンション等の廃品回収を行い働く喜びを実感すると共に遠征等に充当した。これらの活動は、野球はもとより将来に向け大きく羽ばたく人作りを目指したものです。

現在も創部時のインディアンズ精神を受け継ぎ少年野球活動を展開しておりますのでご理解を賜ります様よろしくお願いします。

川野代表

創部した鈴木代表を始め、長谷川代表、柴草代表の熱意と子供達への溢れんばかりの愛情の結果であると思います。特に長谷川相談役は、休部時期子供達が在籍していないにも関わらず将来の子供達が野球に携われるようにと熱い思いを持ち続け関東団地連盟会長まで務められインディアンズを守って下さいました。本当に大変だったと思います。活動再開後の保護者としてお礼を申し上げます。有難うございます。

私は、これからも長谷川相談役と柴草相談役には色々学ばなければなりません。この場をお借りしてこれからもご指導宜しくお願い致します。この記念すべき年に代表に指名され大きな重責を背負って行く覚悟であります。又、地域活動を通し社会へ貢献すべく関係各所との連携も重要です。又、昨今インディアンズ及び地域少年野球を取り巻く状況でありますが、少子化に伴い入部される子供たちが減少の傾向であります。幸いにも現在インディアンズは、Cチームでの単独出場を行っていますが、これからの先を見据え多くの選手を如何にしたら入部してもらえるだろうか対応を熟考したいと思います。

インディアンズの更なる10年を積み重ねるため、保護者、OBOG、地域皆様の力添えをどうかよろしくお願いいたします。

長谷川相談役

幸町公園で「幸町リトルインディアンズ少年野球部」として産声を発してから半世紀が経ち、現在もまた「インディアンズファイト」と明るく元気な野球少年・少女の声が聞こえることは誠に感慨深いものがあります。

地域に根ざした少年野球クラブとして、地域の心温まる多くの人たちに支えられ、練習場所は幸町公園から現在の幸町第二中学校の建設予定地であった場所で汗を流し、その後子供広場で強いチーム作りを目指して活動してきました。

子供広場は当初、多くの草や瓦礫がありましたが、地域の皆さんや親交のあった少年野球チーム「千草台スターズ」「あやめ台リトルジャイアンツ」など多くの皆さんのご協力で子供達が安心して活動できる運動広場に整備できたことが懐かしく思い出されます。その後千葉市が政令指定都市に移行するのに伴い広場の一角に保健センターが建設された際にも地域の皆さんの献身的なお力添えを賜り子供広場として使用継続ができました。

このように恵まれた環境の中、多くの野球少年が集まってきてより強いチーム作りにも一層拍車がかかり、創部20年までには地区大会優勝はもとより、千葉市の大会で頂点に立ち千葉県大会でも準優勝、また朝日旗争奪関東団地少年野球大会では各都県の強豪を撃破して優勝し阪神甲子園球場での全国高等学校野球選手権大会の開会式に招待されるという素晴らしい思い出があります。

又、海外の子供達との交流として中国へ二度遠征、野球発祥の地アメリカにも遠征し少年野球の楽しさを共に味わう親善交流試合を行いました。併せてチームの恒例行事として毎月最終日曜日の朝には廃品回収を行い、夏休み期間中には「インディアンズ祭り」を地域の多くの子供達の参加のもと行ってきました。最後に「幸町リトルインディアンズ」を立ち上げてくれた故鈴木勝彦氏（初代代表）のご冥福をお祈り申し上げます。

現在のインディアンズチーム

創部から50年を経たインディアンズは当初から変わらず子供広場を拠点とし活動を行っています。

子供広場が完成した当時のOBが植樹した桜の木が、春になると今も変わらず満開の花を咲かせます。現在の部員は幸町第三小学校をベースに登戸小学校、幸町小学校を併せ30名ほどとなっており、ここ数年は千葉市少年野球協会、美浜区連盟、関東団地連盟、京葉野球連盟の各大会で優勝を収めるなど強豪チームの一角を成しています。

特に2018年（平成30年）のAチームは京葉野球連盟の大会で５連覇を成し遂げ、千葉市秋季中央大会を含む他の大会でも優勝、その年の年末に行われた納会では６本の優勝旗が並ぶ快挙を達成しました。

また、2019年（令和元年）に初開催されたインディアンズカップでは初代優勝を果たし、2021年のAチームは美浜区連盟で夏季大会を除く３大会で優勝（2020年（令和２年）を含めると５回の優勝）、Cチームは千葉市低学年大会で優勝しました。

コロナ禍で一時中止となりましたが野球以外のイベントも積極的に行っており、マラソン大会の開催、地域行事であるガーデンタウン餅つき大会への参加、春は幸町公園で花見会、夏休みには房総での合宿を催し、昨年より順次再開しチーム内外の交流を深めております。

昨今、少年野球チームは年々減少しており厳しい状況が続いております。当チームも例外ではありませんが、OBが築き上げた伝統あるインディアンズが今後も活動を続けていけるよう、子供たちを中心に日々奮闘しております。

最近の戦績

2012年（平成24年）Aチーム　関東団地連盟読売大会優勝
2016年（平成28年）Aチーム　関東団地連盟秋季大会優勝
　　Cチーム　京葉野球連盟秋季大会優勝
2017年（平成29年）Aチーム　美浜区連盟春季・秋季大会優勝
　　Aチーム　関東団地連盟秋季大会優勝
　　Bチーム　京葉野球連盟春季・秋季大会優勝
2018年（平成30年）Aチーム　千葉市協会秋季中央大会優勝
　　Aチーム　美浜区連盟夏季・BWT優勝
　　Aチーム　関東団地連盟読売・秋季大会優勝
　　Aチーム　京葉野球連盟春季大会優勝　※５連覇達成
　　Cチーム　美浜区連盟秋季大会優勝
2019年（令和元年）Aチーム　インディアンズカップ優勝
　　Bチーム　京葉野球連盟春季大会優勝
2020年（令和２年）Bチーム　美浜区連盟秋季・BWT優勝
2021年（令和３年）Aチーム　美浜区連盟春季・秋季・BWT優勝
　　Cチーム　千葉市協会低学年大会優勝
2022年（令和４年）Bチーム　京葉野球連盟春季大会優勝

創世記①〔1974年（昭和49年）～1976年（昭和51年）〕

まず私達のチームが基盤をおいている千葉市幸町１丁目の背景と歴史についてお話しいたします。

高度成長時代が始まり、1954年（昭和29年）10月から、富津から浦安まで80キロメートル、広さはおよそ11,000ヘクタール（全県面積の約２％）にわたる（千葉県臨海地域造成工事）が始まりました。千葉港周辺だけでも出州から幕張にいたる広大な工事が行われ新しく600万平方メートルという広大な陸地が浮かび上がりました。千葉市幸町１丁目は海浜ニュータウンと言われる埋め立て地域の一角にあります。

1972年（昭和47年）埋立地の砂の上に、コンクリートブロックが置かれマンションが建設されました。東京湾の広大な埋立地に一瞬にして出現したという感じのニュータウンでした。環境も交通も整わず、住民意識もばらばらの、砂漠のような味気ない町でした。そこにマンション、公団、あるいは県営住宅、商店街という種々雑多な住宅地域が混在していました。

そして自治会は住宅区分ごとに形成され、自治会間の交流も殆んどなく、当然のことながら住民同志のつきあいも非常に狭く浅いものでした。そして、1972年（昭和47年）から1975年（昭和50年）にかけて鉄筋14階建て所帯数1,400のガーデンタウンという高層住宅が建設されました。当然のことながら、騒音問題、電波障害等、いろいろな問題を引き起こし、住民間の軋轢をさらに増していきました。当時はこのように殺伐とした地域でした。だれが言うともなく“住眠”という新語が生まれました。これは、都内に出勤して、ただ、寝に帰るだけのところという意味で、皮肉ともあきらめともつかない生活があるだけの所でした。

このような親同士の反目は、当然子供の世界にも反映していきます。「お前はマンションに住んではいないので、庭で遊ぶな」「水道を使うな。管理費から出ているんだぞ」とか、毎日争いが絶えない日はありませんでした。

幸町リトルインディアンズ創設者の東京都内に勤務する鈴木勝彦さん当時41歳の一家が砂漠の中の町、千葉市幸町のガーデンタウンと呼ばれる団地の一角に引越ししてきたのは、そのような状況下の1974年（昭和49年）３月のことでした。

全国から住民が移住し、子ども達の姿がどこへ行っても見られるようになっていました。しかし、子ども達のために組織化されたクラブなどもなく、整備されたグラウンドもありませんでしたが、子どもたちは、果敢に、“遊びの場所”を開拓して、瓦礫とごみの広場で、早くも野球を始めていました。

ある日、鈴木さんが子ども連れでベビーカーを押して散歩をしていると、草野球をやっていた子ども達のボールが鈴木さんの前に飛んできました。鈴木さんは「ここは危ないから公園（幸町公園）へ行ってやろう」と声を掛け、大学時代に野球部にいたこともあり野球の基礎を教えてあげました。それが子ども達のお眼鏡にかなったようです。「おじさん、また教えてね。」これが子ども達との最初の出会いでした。

この子どもたちと知り合い、土曜日や日曜日には、仲間に入っていっしょに野球をしているうちに、いつの間にか、その指導者になっていたのです。こうして、1974年（昭和49年）６月、メンバー６名の少年野球、幸町リトルインディアンズが誕生したのです。

“インディアンズ”の名称の由来は、鈴木氏が留学したダートマス大学の設立目的に基づくものだそうです。

公園は子ども達でいっぱいになりました。見かねたお父さん達は練習の手助け、そしてお母さん方は飲み物などの手配、マンションの理事会も全面的に支援を約束。いつの間にかチームらしくなりました。

少年達も集まったお父さん達の前に大張り切りでランニングや体操、ノックとなかなかに厳しい訓練でしたが元気いっぱいでした。道具や練習場など困難な問題を抱えていましたが、目を輝かせて夢中にやっている少年達をみると、何とか解決してやらねばというのが、お父さん方の率直な感想でした。

たまたま近くに中学校の建設用地がありました。しかし、その建設用地は砂地でしかも瓦礫の山で、野良犬の住み家になっているような大変ひどい土地でした。しかし、中学校が建設されるまでという条件で、その空地を千葉市から借りることになったのです。

少年たちの、最初の目標は、グラウンド造りになりました。なにしろ、ひどい荒地で、砂と瓦礫の山です。大人さえも手を出しかねる荒地を、こつこつと汗しながら、整備していかなければなりませんでした。しかし、少年たちの人数も次第に増え、１年半もたったころには、さしもの荒地が見事な三面の少年野球場に生まれ変わっていたのです。ベンチやバックネットも設置し思い入れの深いグラウンドになりました。それだけではありません。同じころできた少年サッカークラブも、これにならって、一面のサッカー場を完成させたのです。桜の木を植えたのもインディアンズでした。

（創設者鈴木勝彦さんのブログより抜粋）

創世記②〔1976年（昭和51年）～〕

最初にこういうグループに集まるのは各地域の元気なガキ大将でした。鈴木氏は地域で初めてできた少年サークルの指導者として、学校によく行きました。学校の廊下で立たされているのは、いつも馴染みのガキ大将でした。

しかし、このようなガキ大将達が手を結ぶようになると、いつのまにか地域の子供達はお互いに仲良くなっていきました（最近のいじめとは違います）。そして一年も経つと自治会あるいは居住区の範囲を越えて子供達の輪は広がって行き、２年目には２丁目の子ども達までもインディアンズに入ることになりました。小学校区を越えて子供達の輪は広がり、小学校３年生から６年生まで85名の大所帯に成長していきました。やがて大人も役員コーチとして徐々に私達の輪の中に入り、「どこに住んでいようと、子供達の世界は一つなのだ」「子供達の世界を守っていこう」という意識が芽生えていきました。

幸町１丁目にあるただ一つの小学校が幸町第三小学校。当時のH教頭先生はインディアンズの最大の理解者でした。今以上に、勉強以外の活動は、勉強の邪魔であると思う父兄もおりました。そんな時、H教頭先生は地元紙、千葉日報の取材に対し「野球部の子ども達は自主性も増し、責任感も強くなってきている」「また、学習面でも変化が現れた。昨年１年間を通じ、２学期に成績が下がった子どもが２人いたが、３学期に下がった子どもはおらず、逆に上がった子どもが８人もでている」と強烈な援護射撃をしてくださったのです。そして、同紙は「このインディアンズの指導方法は今後、青少年の指導方法をめぐって注目を集めそうだ」と書いております。

そして、お祭りひとつなかったこの町に、子どもたちのための“インディアン祭り”が定着しました。それまでは、公団には公団の、県営には県営のあるにはあっても、団地別意識ゆえに、むしろ角を突き合わせていたような各自治会の間にも広く“わが町意識”に根ざした連帯が芽生えてきたのです。青少年対策として、青少年の社会参加ということが言われますが、逆にここでは、負うた子に教えられて、町全体が息吹はじめたのです。

ただ子ども達はグラブなど道具を大切にせず、道具を忘れても取りに行かない。なくなっても買ってもらえるからということもあって、物を大切にするために安易にユニフォームを買えないようにしました。それで試合に行ってもユニフォームは無し。そんなチームはインディアンズだけでした。しかし、連盟の役員も趣旨を理解し許してくれました。そのような経緯があって物を大切にするために子供たちで廃品回収を行うことを決めました。

「お早うございます。インディアンズです。」団地内では毎月末の日曜日に少年たちが、元気よく各団地を回って、廃品回収を行うようになりました。物を大事することを学ぶことと、チームの運営費は、自分たちの手でという理由がありました。

このような活動を通して、インディアンズの指導理念とも言うべき五本の柱が固まっていきました。

一、強いチームづくり　たくましい身体と精神を養う。
二、廃品回収で働くことの大切さと独立心を育てる。
三、地域活動社会に奉仕する心を育てる。
四、草木の手入れ―自然を愛する心を育てる。
五、外国の友達との交流―世界に雄飛する子供を育てる。

（創設者鈴木勝彦さんのブログより抜粋）

主な出来事

1974年（昭和49年）鈴木勝彦氏が幸町リトルインディアンズを創部
1976年（昭和51年）現幸町第二中学校の用地をグラウンドとして造成・緑化開始
1978年（昭和53年）「インディアンズだより」が全国スポーツ少年団団誌コンクールに入賞
1979年（昭和54年）第１回中国遠征（7/25～30の６日間）
（少年野球では世界で初めての訪中。新聞・TVでもとりあげられた。）
※北京、上海を訪問（子供27名、監督・コーチ５名、実行委員７名、TVスタッフ５名）
子供広場オープン（100本の桜を植樹―当時は１m足らずの苗でした。）
関東団地連盟で初優勝を達成
1980年（昭和55年）瑞穂リトルインディアンズ誕生（大網の兄弟チーム）
※夏休みには相互にホームステイを実施
1982年（昭和57年）千葉市社会教育功労賞を受賞
1983年（昭和58年）サウジアラビアの若者たちが子供広場へ
1984年（昭和59年）アメリカ遠征（鈴木勝彦氏はハノーバーのダートマス大学経営学部大学院OB）
※ニューハンプシャー州ハノーバー、シアトルを訪問（子供18名）
いろいろな企業への働きかけで寄付金が700万円ほど集まった
1986年（昭和61年）第２回中国遠征（8/15～26の12日間）
※北京、天津、南京、揚州、上海を訪問
千葉市軟式野球連大会で念願の初優勝！
1987年（昭和62年）「インディアンズだより」100号記念誌発行
一番部員が多かった時は、全学年で120人程在籍。

中国遠征〔1979年（昭和54年）〕

インディアンズは、1974年（昭和49年）に千葉市の新興住宅団地に誕生した小学生の野球チームです。1979年（昭和54年）、部員80人、指導者18人。創部当時は、グラウンドはもちろんのこと道具も満足にありませんでした。部員の数もふえ何人かの父兄がコーチに就任し、指導にも熱が入ったころでした。私達指導者は子供達に何かが欠けていることに気づきました。それは活気です。大きい声が出ない。無気力。コンクリートの壁にとじこめられて育った子供の特徴であると聞いています。

私達は、野球の技術を数えるだけではなく、どうしたら大らかな子供に育つよう手助けできるかを考えはじめました。胸がおどるような目標を持たせてやりたい。海外へ行って野球をやることはどうだろうか。私達は子供達に呼びかけました。しかし、返ってきたのは「僕達なんかに行ける筈がない」という無気力な答でした。正直のところ、私自身も、少々大きすぎる夢かも知れないと思っていました。

まず、一歩を踏み出そう。私は自分自身にそう言い聞かせて具体的な目標の設定にとりかかりました。そして私達は、日本と深い歴史的つながりを持つ、近くて雄大な中国に照準を定めました。当時は、日中平和友好条約が結ばれる数年前でもあり、両国の交流の道はまだ狭く、無名の一少年サークルが訪中することは至難の技でありました。しかし、中国で野球が始まったというニュースをたよりに、“中国へ行こう”と、目標をたてました。1975（昭和50年）年5月のことです。

ゼロから出発した私達には中国遠征を実現するために、すべき事は山ほどありました。まず、資金づくりのために、子供達と父兄が月に一度、地域の古新聞・ダンボール等の回収を始めました。やがて、子供達が額に汗して働く姿に、地域の人々の応援も得られるようになりました。廃品回収で得たお金で土を買い、市から借りた2ヘクタールもの荒地を立派なグラウンドにつくり変えました。多くの大人・子供の努力の結晶であります。

ホームグラウンドを持って練習がのびのびとできるようになると、野球の技術も向上し、いつの間にか、千葉県下でも指折りの強豪チームになっていました。子供達にも積極性と自信が見られるようになりグラウンドづくりや種々の活動を通じて、コーチ・父兄の結束も固まり、組織も充実してきました。

そして、1979年（昭和54年）3月。遂に、この、無名の子どもサークルに対して、中国政府から招請状が届いたのです。それは、日中平和友好条約が結ばれてから、半年目のことでした。子どもたちにとっては、中国でも野球が始まったというニュースをたよりに、「いつの日にか、中国の子どもたちと野球を。」と、心に描いていた夢が実現したのです。

中国側の歓迎ぶりは、すばらしいものでした。実際のところ、どのように自分達が受け入れられるのか、一抹の不安をもちましたが、そんなものは全く杞憂にすぎなかったのです。北京では体育総会の晩餐会、子供同士の交歓会が催され、大歓迎されました。又、上海では、ラジオ・新聞で私達の訪問のニュースが流されており、どこへ行っても人気の的でした。試合の時には、観覧席に多くの観衆が詰めかけ日中両国の子供達の一挙手一投足に歓声が湧きました。

中国の少年達は野球を始めたばかりで、当然のことながら技術は未熟です。しかし、新聞記者やテレビのレポーターから、中国の子供の腕前をたずねられたインディアンズの子供達は、「練習をつめば、きっと上手になるよ」と答え、見事な社会性を見せました。又、いろいろな場面で中国の子供達が良いプレーができるよう、気を配っていました。人間として当然な心づかいをしながら、相手がどこの国の人であろうが、すんなりつきあってみせる、そんな子供達に、次代を担う国際人の姿を見る思いでありました。行く先々で、インディアンズの子供達は、「非常に活気がある。しかも、規律正しい」と、ほめられました。5年前の、あの無気力な子供の姿は、どこにもありませんでした。

帰国後、子供達は自信に満ちあふれ、それはきびきびしたプレーにもあらわれました。1979年（昭和54年）秋の大会では強敵を次々と打ち破り、とうとう創部以来の念願であった県大会の優勝を勝ちとったのです。“やればできる”ということを彼等は、しつかり心に刻みつけたに違いありません。

そして、インディアンズの子供達は、私達の想像以上の積極性を発揮しました。彼等は熱烈歓迎の人の輪にとびこんで行き、堂々と胸をはって握手し、半年間レッスンをつんだ中国語で挨拶をしました。大勢の人の前で、又、解放軍兵士の前で、力いっぱい中国の歌をうたいました。お母さん達の手づくりのワッペンを、中国人に、アメリカ人に、老若男女を問わず配り、気軽に話をし、友達になりました。「ニーハオ」「ハロー」と、巧みにつかいこなしました。子供達にとっては、中国人もアメリカ人も全く関係ありません。

北京と上海で2試合行い、2連勝でした。相手は日本で言えば中学の年齢ですがソフトボールを少々やったことがある程度で、野球は素人に近いものです。とにかく友好第一、と子供たちに教え込んで試合に臨みました。打たせようとするあまり手元が狂ってデッドボールが続発するなど珍プレーも多かったです。二千人の観衆もほとんどが野球観戦は初めてのようです。開始直後はただ珍しそうに眺めるだけでスタンドは静かでした。しかし、中国語の場内アナウンスでルールがわかり始めると徐々に沸き始め、最後は熱狂的な声援に変わっていきました。帰国後、体育総会から感謝状が届きました。中国に“少年棒球ブーム”が起きたのはそれからであります。

幸町リトルインディアンズの訪中の様子を日本テレビが同行取材をし、総理府の提供で「日本レポート」:「少年野球で日中親善」というテーマで全国放送されました。1978年（昭和53年）日中平和友好条約締結の翌年で、しかも1979年（昭和54年）が国際児童年であったことで高い視聴率を上げました。

（創設者鈴木勝彦さんのブログより抜粋）

再始動〔2007年（平成19年）～〕

1970年（昭和45年）代に建設されたガーデンタウン一帯も1990年（平成２年）代後半になると子供の数がしだいに減少し、インディアンズも部員不足による休部に追い込まれました。

休部後しばらくの間、子供広場はインディアンズ管理の元で同じ地区の少年野球チームが利用を行っており、創始者である鈴木総監督と監督OBの飯田氏、選手OB高木氏を軸に水面下でインディアンズ再始動に向けた動きを探っておりましたが具体的な進展ができずにおりました。

2003年（平成15年）～2005年（平成17年）に近隣へ大型マンションのシーブレスとブラウシアが建設され子供の数も徐々に増え始めた頃、休止状態であったインディアンズによる子供広場の管理を千葉市へ返さなければならない話が持ち上がりました。その頃、監督OBの飯田氏が亡くなり、チームOBが集まった際に再始動に向けた動きが一気に加速しました。

2007年（平成19年）５月に長谷川相談役、柴草代表を筆頭に高木監督、浅井事務局が中心となり、小学3、4年生の11名で再び幸町リトルインディアンズの復活を果たしました。

再開後の子供たちへの指導は高木監督と同じ草野球チームに所属していた坂上氏とインディアンズ選手OBの樋口氏の協力があり、毎週末子供たちと共に汗を流す野球経験者の熱心な指導は大変大きい存在でありました。休部による影響は大きかったですが、この頃から著しく普及したインターネットや他の少年野球チームとの練習試合を通じての情報収集を行い改めてチームを作り上げていきました。

ガーデンタウン倉庫に保管してあった休部前のユニフォームは練習着用として使用し、試合用ユニフォームは新調しました。これが現在着用しているユニフォームの原型であります。

再始動当時、雨の日はガーデンタウン管理センターで野球教室を開催したり、子供たちと八千代にあるつり堀に行って楽しんだり、試合後はスーパー銭湯やラーメン店などに行くなどイベントも多数行っていたようです。また、同じ子供広場で活動しているCFC（千葉フットボールクラブ）とはインディアンズと合同で冬にサッカー大会、夏には野球大会を開催していました。

2008年（平成20年）からは美浜区をはじめとする各連盟の大会にB・Cチームとして復帰を果たし軌道に乗っていきます。2009年（平成21年）度には再始動後初めての卒部式を開催し復帰後最初の選手を送り出しました。

コロナ禍によって、チーム応援歌による試合は一時期出来なくなりましたが、“緑が燃える～♪”などの応援歌は高木監督による作詞、作曲で現在まで受け継がれております。因みにその他にも幾つか応援歌があり、“ヒットパレード”や“ひょっこりひょうたん島”などもあるそうです。

編集後記

「インディアンズ50周年」、ほぼ私と同じくらいの年を迎えたこのチームはどのように始まったのでしょうか？
この活動に参加するようになって10年にも満たない私が50周年の記念誌制作に携わることになり、まずこのように思いました。現在活動している現役の指導者、ママ、子どもたちも多分詳しくは知らないのではないでしょうか。
「あれから50年！」、きみまろの漫談ではありませんが、創世記の活動を探るべく当時のOBに貴重なエピソードや資料をご寄稿いただくと、今では考えられない驚くべき活動の内容が明るみになり、インディアンズというチームが地域の柱となり、稀有な存在だったことが分かります。創世記に実施された海外遠征やインディアンズ祭りなどは当時としてもとてつもない桁違いのことをしており、現在活動している世代が改めて同様の活動をすることはありませんが、鈴木氏をはじめとするOBの熱意はしっかりと現在に伝わっているように思います。将来の過程としてこの記念誌がインディアンズの飛躍となれるよう受け継がれていくことを希望します。
この度は、50周年記念誌の発行にあたり多くの方々にご協力をいただきましたことを心より感謝申し上げますと同時に、紙面の都合により意を尽くすことができなかったことに対してお詫び申し上げます。
これまでにも少年野球をはじめとし各方面で大変お世話になりありがとうございました。
これからも幸町リトルインディアンズを宜しくお願い申し上げます。

2023年度幸町リトルインディアンズ役員

全　体

代表／川野
副代表／浅井（美浜区事務局長・市協会常任理事）
相談役／柴草、長谷川（関団連顧問）
事務局長／田原（美浜区・京葉総務）
副事務局長／平山
連盟派遣／高橋（美浜区低学年大会委員）
登録審判員／永井（関団連中央支部審判員・美浜区審判員）
鈴木（利）
審判員育成／永井・田原・鈴木（利）
マナー教育／小林、南山、杉田
選手募集／内田
50周年準備委員／田原（実行委員長）・平山・浅井
特命コーチ／千原・中薗・小串·鈴木（利）・永井（大）・石原・
團・鳥海・秋山

Aチーム

監督／大森
コーチ／竹ノ内：29・松澤：28・小林：27・佐藤（傑）・町田・
井上
事務局／小林
マネージャー／佐藤
スコアラー／佐藤
サブマネ／井上
審判／竹ノ内
会計／泉澤
配車／松澤
廃品回収／越後屋
用具・グラウンド／井上
合宿／町田・大森・松澤
イベント／町田
卒アル／梅山・竹ノ内・小林（写真）

Bチーム

監督／日塔
コーチ／南山：29・杉田：28・勝呂：27・尾形・安室
事務局／南山
マネージャー／尾形
スコアラー／岡本
サブマネ／岡本
審判／勝呂
会計／安室
配車／勝呂・尾形
廃品回収／日塔
用具・グラウンド／安室・勝呂
合宿／勝呂・南山
イベント／南山

Cチーム

監督／馬上
コーチ／内田：29・杉田：28・山崎：27・松崎・町田・青木
事務局／杉田
マネージャー／松崎
スコアラー／町田
サブマネ／杉田
審判／山崎
会計／中村
配車／松崎
廃品回収／馬上
用具・グラウンド／内田
写真／山崎
イベント／町田